

大隈重信の大磯別荘に関する一考察

長谷川 明香（当館学芸員）

はじめに

相模湾沿いに面する大磯町は、年間を通して温暖な気候から明治時代以降、別荘地として発展し、なかでも、八人の内閣総理大臣が邸宅を構え、「政界の奥座敷」と呼ばれている。

これまで、別荘に関する研究は、建築学の視点から別荘建築の様相や立地及び景観などの分析がなされている。とりわけ、湘南地域の別荘に関する研究は、越沢明氏⁽¹⁾や水沼淑子氏⁽²⁾、小山七海氏、荒井歩氏⁽³⁾などの研究成果があげられる。一方、近年歴史学においても注目され始めており、佐藤信氏⁽⁴⁾や奈良岡聡智氏⁽⁵⁾、池田さなえ氏⁽⁶⁾などの成果があげられている。

本稿で取り上げる大隈重信の大磯別荘は、山縣有朋や伊藤博文、陸奥宗光らの別荘と近接した場所であり、その一部は現在、明治記念大磯邸園として整備が進められている（令和六年一月二三日をもって東地区の旧大隈重信別邸・旧古河別邸と陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸が一般公開）。

大隈は明治三〇（一八九七）年に、日本郵船二代目社長を務めた吉川泰次郎の長男吉川慎一郎から東小磯の土地と建物を購入し、その後増改築を施しながら、明治三四年に実業家の古河市兵衛に売却するまでの四年間、大磯別荘を利用した。大隈の大磯別荘に関する研究はほとんどなく、それ以外の大隈が所有した邸宅の研究も少ない⁽⁷⁾。大磯の別荘の分析をしている佐藤氏や奈良岡氏も、伊藤や山縣の別荘が中心となっている。現状、大隈の大磯別荘については、水沼氏の建築史における研究成果のみといっ

ても過言ではない。

以上の課題から本稿では、大隈の大磯別荘の利用実態などを明らかにし、大隈が大磯に別荘を構えた意義を考えたい。なお、建物の概要や特徴などは、水沼氏が詳細な分析を行っているため、本稿では触れない。

一 大磯別荘購入の理由

大隈の大磯別荘は山縣や伊藤、陸奥らの別荘と近接していた。大隈は彼らと政治的信条の違いから対立することが度々あったなかで、なぜ彼らと非常に近い距離に別荘を構えたのだろうか。本章では、大隈が大磯別荘を購入した経緯とその政治的背景について取り上げ、その理由を探る。

大隈は明治三〇年五月に、吉川慎一郎から土地と建物を購入しており、五月三日付で土地と建物の売買届が町に出されている⁽⁸⁾。慎一郎は、日本郵船の二代目社長を務めた吉川泰次郎の長男である。売買届には後見人の名前が記載されていることから、大隈が購入した際、慎一郎は幼かったとみられる。ちなみに、大隈と泰次郎・慎一郎親子の関係については不明である。

大隈が大磯に別荘を構えた頃には、すでに山縣や伊藤らが邸宅を構えており、政界人の別荘地として大磯は認知されていた。水沼氏は、大磯に別荘を持つことが政治家のバロメーターの役割を果たしているという世評から、大隈が大磯に別荘を構えたと述べている⁽⁹⁾。確かに、大磯に別荘を持つことがいわばステータスのような観念があった可能性はある。大隈は、明治二年一〇月に、山縣を訪ね大磯に来ており⁽¹⁰⁾、政治家の交流場所としての大磯を認識したと考えられる。しかし、大隈が大磯を選んだ理由を示す直接的な史料はなく、これはあくまで推測にすぎない。そこで

大隈が別荘を建てた東小磯の土地は海岸に面しており、大磯停車場からも比較的近く好立地であつた。東隣には、陸奥の別荘があつたが、大隈が別荘を購入した際、陸奥が抱いた感情について興味深い新聞記事がある。

●陸奥伯逃出さんとす
今回、大隈伯は大磯なる故吉川泰次郎氏の

別荘を譲受けたるが、其別荘は陸奥伯の別荘の隣りに当れるにぞ、陸奥伯の別荘の隣りに当れるにぞ、陸奥伯は頃日或人に向ひ、「今度大隈が隣りの吉川の跡を買ふと云うことだから随分邪魔をして見たが、逸う／＼買ふことになつた様だ、大隈に隣りに住まれてはたまるものでない、最う己れはソロ／＼逃出さうと思ふ」と語りたりとなむ、樺山伯此話を聞きて評すらく「陸奥だつて逃げ出さんでも好かろうに、彼地に伊藤さんと大隈さんと陸奥さんが揃へば極く面白いのだに」、

あくまで新聞記事のためその真偽は分らないが、隣に大隈が別荘を構えることに對して好印象は持つていなかったことが分かる。事実、大隈と陸奥は対立關係にあり、明治六年以降にその關係が悪化し、陸奥が亡くなるまで続いた⁽¹²⁾。しかし、陸奥自身も完全に大隈を嫌つていたわけではなく、互いに評価をした上でライバル視していたと考えられる。新聞記事から完全な拒絶ではなく、少し皮肉が込められているようにみえる。しかし、決して喜ばしいことではなかったと考えられる。陸奥は大磯の別荘を自らの病氣療養のために建てており、プライベート利用を強く意識していた。その隣に政敵である大隈が来ることは、良い気分ではなかったのだらう。

陸奥の別荘がすぐ隣にあることは当然大隈も分かっていたはずである。では、なぜ大隈はその場所を選んだのだろうか。その理由として考えられ



【図】 大隈の大磯別荘周辺の地図

国土地理院地図を元に作成。

るのが、西隣にあった旧佐賀藩主鍋島家の別荘である。

明治二九年に、佐賀藩第十一代藩主の鍋島直大が西小磯の土地を購入した。購入した土地は大隈が後に別荘を購入する場所のすぐ東隣で、西隣には伊藤の滄浪閣があった(図)。鍋島家は翌年の三月二九日付で、大磯町に家屋新築届を提出している⁽¹³⁾。大隈は佐賀藩出身であり、鍋島家から資金援助を受けるなど深いつながりを持っていた⁽¹⁴⁾。大隈の資金源は、

土地投機や鉄道建設事業、三菱からの支援（特に、改進黨・進歩党の活動）など様々であった⁽¹⁵⁾が、鍋島家からも援助を受けていたのである。

大隈にとって鍋島家は非常に重要な存在であり、その別荘が大磯に建てられたことは、大隈が隣に別荘を購入したことに起因するといえる。

大隈が大磯に別荘を購入した理由は、大隈が政治的交流の場として定着しつつあったことに加え、資金援助を受けていた鍋島家の別荘が存在したことが大きな要因と考えられる。また、購入した五月は松隈内閣に分裂の兆しが見え始めている時期で、自由にゆつくりとプライベートを過ごす場所を求めている可能性がある。

二 大磯別荘の利用実態

実際に、大隈は大磯別荘をどの程度、どのように利用していたのだろうか。本章では、主に新聞記事からその様子を見てみたい。なお、大磯別荘所有時期の大隈の動向については付表もあわせて参照されたい。

(一) 大磯別荘の利用記録

別荘の購入にあたって、前所有者の吉川泰次郎が結核を患っており、その療養のために過ごした別荘であったことから消毒を行った⁽¹⁶⁾のち、早速五月八日に大磯の別荘へ赴いている⁽¹⁷⁾。その後は、多忙による疲労からか体調を崩しており、早稲田の本邸（以下、早稲田邸とする）や官邸にて療養していた⁽¹⁸⁾。大隈は、第一伊藤内閣及び黒田内閣の外相として条約改正交渉にあたっていた際、外相官邸前で襲われ右脚を切断する大怪我を負った。以来足の痛みに襲われることがしばしばあり、政務が行えず療養を必要としていた。足の痛みに襲われた時は、大磯までの移動が困難の

ため、早稲田邸と官邸を利用することが多かった。また、病気になった際には大磯行きを延期していることがほとんどで、療養には主に早稲田邸を使っていたことが分かる。

大隈が大磯別荘に滞在中、複数の人間が大隈を訪問している。例えば、明治三〇年八月一四日には政治家・華族である安場保和が大磯の別荘を訪れ、台湾鉄道について大隈と協議している⁽¹⁹⁾。また、翌二五日には外務次官の小村寿太郎が大隈と何らかの打ち合わせを行うため、大磯別荘を訪問している⁽²⁰⁾。途中一六日には、有栖川宮が帰朝したため一度東京に帰り、再び大磯に戻る際、汽車内で韓国の政治家である朴泳孝と交流している⁽²¹⁾。

また、九月一日には、大磯別荘で初めて園遊会を開催している。

【史料二】⁽²²⁾

●大隈伯と大磯　大隈伯は一昨日、大磯の別荘に同地官民の重立ちたる人々を招待して園遊会を開き、道路を改良し清潔法の施行に一層の注意を加へ且つ旅客に便利を与へ以て其繁栄を増加することに就て懇篤なる注意的演説を為し、了りて松林の間に立食の饗応を為せり、史料によると大磯の官民の有力者を招き、大磯の発展のための演説をしたことが分かる。

大隈は饗応を良く行い外国人や政界人、実業家まで幅広い人物を招待して園遊会を行っていたが、大磯別荘の園遊会はいくまで大磯町への貢献から生まれたものだったと考えられる。しかし、現時点で確認できる大磯別荘での園遊会の記録はこの一回のみで、その間、早稲田邸では度々園遊会や観菊会が行われていることから、本邸の機能と別荘の機能を使い分けていた可能性が高い。本邸は病氣療養もしくは賓客をもてなす場所として利用し、大磯別荘は政務から少し離れて家族とゆつくり過ごすための場所だ

つたと考えられる。

利用記録の全体を分析すると、八月及び一二月に大磯別荘で過ごしていることが多く、確実に避暑避寒のためである。また、明治三三（一九〇

〇）年に入ると、大磯別荘の利用が減少する。同年二月から四月の間で皇族が大隈の大磯別荘を利用しており、個人での利用ができなくなっているが、前年や購入した年と比べると利用頻度が落ちていたことが分かる。

（二）松隈内閣倒閣後の大隈と大隈

ここでは、もう少し詳細に利用実態を明らかにする。大隈の大磯別荘所有時期において重要な出来事は大きく分けて二つある。一つは松隈内閣倒閣後の伊藤との会談である。

大隈が別荘を購入したのは、松隈内閣の外相兼農商務相を務めている時期で、松方率いる薩摩派との分裂が始まっていた。明治三〇年一月二十九日に松方が辞表を提出し松隈内閣は倒閣し、伊藤は自由党及び進歩党との提携を目論み大隈や板垣らと新内閣の組織について議論を重ねることになった。大隈は明治三一年一月二日から四日にかけて伊藤と協議をした。

【史料三】（23）

電報

○伊藤侯大隈伯の会見（三日午後三時五十分 大磯特派員発）

伊藤侯ハ愈昨夜を以て、大隈伯の別業に人を派し親しく伯と面談せんことを申込たるも、大隈伯邸にハ当夜来客あり塾議中なりしを以て、侯との面談を謝絶し、本日午前九時伯より伊藤侯を滄浪閣に訪ひ午前十一時まで会見密談せり、

【史料四】（24）

◎伊藤大隈二老の会見

伊藤侯ハ強固なる新内閣を組織するにハ大隈伯と提携するに若くハなしとて、旧臘来頻りに伯の入閣を望み居るとなるが、去る二日大磯に於て二老会見の際も伊藤侯より大隈伯に向ひ、此国家内外多事の際強固なる内閣を組織して、少なくとも三・四年間継続せしめ以て、上御一人の叡慮を安んじ奉り、下万民の希望に適はしめざるべからず、就てハ是非共足下入閣を希望するとの主意を以て、百方泣き付きたるよしされど、大隈伯ハ聯立内閣の困難なるを説き伊藤侯の一手にて新内閣を組織せよと勧め、最後に余ハ閣外に在るも充分援助せんと述べたるに侯ハ其志辱けなしと雖も、閣内に有力者なきハ何より困難なりと再三再四入閣せんと哀請したりと云う、右にて多分大隈伯ハ入閣するにとなかるべしと信ずれども、伊藤侯ハ昨日午前大隈伯を訪問して一時三十分間程懇談する所あり、侯の辞して帰へらんとするや伯ハ玄関迄見送りたる際、侯ハ伯の手を把りて導きつゝ元氣能く別れたりと云へば、尚ほ其間に一種の事情継続せざるやと云ふものあり、暫らく一説として報ず、（大磯特派員報）

史料三と四で内容の食い違いが見られるが、滄浪閣及び大隈の大磯別荘で会談が行われたことは事実である。史料四によると、伊藤が大隈への入閣を懇願したものの、松隈内閣で経験した連立内閣の難しさから大隈が、拒否したことが分かる。

新聞記事のためどこまでが真偽か分からないが、少なくとも新しい内閣について伊藤と大隈間で議論が交わされ、それが大磯で行われたことは明らかである。実際、この時期に伊藤や山縣と会談を行うため、多くの政界人が大磯に來ていることが明らかとなっている（表）。また、当然ながら大隈の周辺の人物らも大磯に集っており、これまでの大磯の政治家交流には見られなかった人物が確認できる。

(三)皇族の大磯滞在と大隈
二つ目の大きな出来事は皇族が大隈の大磯別荘を利用したことである。
明治三十一年九月二七日に皇太子（のちの大正天皇）が沼津から大磯に汽車
で訪れ、鍋島家の別荘に滞在した⁽²⁵⁾。当主の鍋島直大は元老院議員や宮
中顧問官等を歴任し、明治天皇や大正天皇からの信頼も厚かったことから
滞在場所に鍋島家の別荘を選んだものと考えられる。すでに述べたよう

【表】 松隈内閣倒閣後の大磯

年	日付	記事見出し・内容
明治30年 (1897)	12月26日	添田壽一が滄浪閣へ赴く * 添田は明治大正期の実業家
	12月27日・28日	井上馨が滄浪閣にて伊藤博文と会談し、 群鶴楼に宿泊する
	12月28日	黒田清隆が滄浪閣へ赴く
	12月30日	大隈重信が伊藤との会談のため自らの大 磯別荘へ赴く * すでに、 <u>犬養毅</u> ・ <u>伊東巳代治</u> ・ <u>大石正 巳</u> ・ <u>林有造</u> ・ <u>岩崎彌之助</u> ・ <u>大岡育造</u> が大 磯に滞在
	12月31日	大磯にて伊藤・ <u>山縣有朋</u> ・ <u>芳川顕正</u> らが 会談する
明治31年 (1898)	1月2日・4日	伊藤と大隈が滄浪閣にて会談する
	1月4日	伊藤が大磯滞在の山縣を訪問する
	1月5日	滄浪閣にて山縣・芳川・ <u>桂太郎</u> らが会談 し、芳川・桂は群鶴楼に宿泊する
	1月6日	小湊庵にて山縣・芳川・桂が会談する

出典：『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『報知新聞』

に、鍋島家と大隈の大磯別荘は隣接しており、大隈は、同年一〇月一日に
皇太子のご機嫌伺いのため鍋島家の別荘を訪問している⁽²⁶⁾。
明治三十三年二月五日に明治天皇の皇女である常宮昌子内親王と周宮房子
内親王が、避暑のため大隈の大磯別荘を訪れた。

【史料五】⁽²⁷⁾

●内親王大磯御成 常宮周宮内親王殿下ハ昨日午前九時廿分高輪御
殿御出門十時十分品川御発車、御教育主任佐々木伯夫妻并に御付婦人
数名を従へさせられ大磯に成られたり、大磯ハ大隈伯・古河市兵衛氏
別荘を御旅館と定めさせられ、多分来る三月頃迄御滞在相成る筈なり
「古河市兵衛氏別荘」とは、大隈の大磯別荘の東隣にあった陸奥の別荘
のことを指していると思われるが、土地台帳をみるとこの時点では、陸奥
の妻亮子が所有していることになっている⁽²⁸⁾。しかし、台帳には親戚と
して市兵衛の印鑑があり、陸奥の死後、土地と建物の相続において少なく
とも古河家の関与があったことは間違いないだろう。ちなみに、完全に古
河家の所有となるのは明治三十七年に、陸奥の長男廣吉から次男の古河潤吉
へと所有権が移った時である⁽²⁹⁾。大隈が市兵衛に売却した理由の一つに
はこのような背景があったことも考えられる。
また、史料五には同行者に佐々木伯夫妻と記されているが、これは佐々
木高行夫妻のことである。佐々木は明治二年から亡くなるまで枢密顧問
官として、常宮・周宮内親王の主任養育係を務めた。その佐々木から別荘
滞在について大隈へ通知が出されている。

【史料六】⁽³⁰⁾

常宮
周宮両殿下来ル五日午前十時十分新橋発汽車ニテ神奈川県下大磯へ被
為成、同所其御別邸ニ於テ

御滞在被為遊候間、此段御承知迄ニ及御通牒候也、

明治三十三年二月一日

常宮 周宮 御養育主任伯爵佐々木高行
伯爵大隈重信殿

大隈にとって両内親王の滞在は光栄なことであり、迎え入れる前に畳の張替えなどを行っていたことが明らかとなっている⁽³¹⁾。両内親王が滞在场所に大隈の大磯別荘を選んだ理由は判然としないが、明治三十一年六月二三日に皇太子（大正天皇）が早稲田邸を行啓することを伝えており⁽³²⁾、両内親王が大隈の大磯別荘滞在前に、皇族との何らかの接触があったことは明らかである。また、以前皇太子が滞在中鍋島邸が何らかの理由で使えなかった可能性も考えられるだろう。

また、両内親王は町の小学校の運動会を見学したり⁽³³⁾、卒業式に参列したりと⁽³⁴⁾、町の行事へ参加しており、大隈自身だけでなく町にとって大きな出来事であった。

三 大磯別荘の売却

すでに述べたように、大隈は明治三四年六月に古河市兵衛へ大磯別荘を売却した。売却理由の一つとして考えられるのが早稲田邸の火災である。同年三月一四日に早稲田邸の応接間のストーブから出火し半焼した⁽³⁵⁾。約百坪の邸宅と庭園の樹木が焼失するほどの大火事であった。大隈は庭園にいて来客のため邸内に入ろうとした時だったため即座に避難ができたようである。また、大隈が創設した東京専門学校の生徒らが駆け付け邸内の家具や調度品などを持ち出すも、所蔵品や書類類は全焼してしまった。住む場所を失った大隈は、一時的に市ヶ谷砂土原町にあった岩崎邸に滞在す

ることになった。

当時、大隈は所持していた株が下落し始め、早稲田邸の建築のために借りていたお金の年賦返済に困るほど資金繰りに悩まされており、この火災は大隈にとって大打撃だった。早稲田邸を再建するには大磯別荘を売却せざるを得なかったと考えられる。実際には、大磯別荘を売却しただけでは足りず、持ち株を売り、鍋島家や渋沢栄一からの援助を受けるなどして何とか再建ができた。

売却は古河家と関係のある岡崎邦輔を仲介して行われた。岡崎は自由党や立憲政友会などの政党に所属し、加藤高明内閣の農林大臣や貴族院議員などを歴任した政治家で、陸奥の配下として活躍した。陸奥とは従兄弟関係にあり、古河家とも縁があったため、大隈は岡崎に仲介を頼んだと考えられる。大磯別荘の売却に関して岡崎から大隈へ宛てた書簡が残されている。

【史料七】⁽³⁶⁾

謹啓 過日参堂之節御内意拝承候大磯御別荘之件、早速古河へ相伝へ其掛之もの等へ協議候処、何分外ならず閣下之御内意相背候も不本意に付、則御下命之如く現形之儘金参万円に御譲受申上候事に決定仕候間、左様思召被成下度候、就而は右受渡之手続相伺度、昆田文二（次）郎参上為致候間、可然御指図奉願候、其内拝芝万縷可申上候得とも、不取敢、右貴意如此御座候、頓首

（明治三十四）六月五日

邦輔

大隈伯爵閣下

二陳 お倉へ之挨拶云々御内意も候処、右は平に御免相蒙度、此之義は閣下より可然御取計被成下度候、右御断り旁申上置候、

史料によると売却の件を岡崎が市兵衛へ伝え、市兵衛はそれに承諾し、三万円で譲り受けることが決定したことが分かる。手続きのために派遣された昆田文次郎とは、弁護士で法律顧問として古河財閥に入り、鉅毒事件などの処理にあたった人物である。また、岡崎の陳書もあり、そこには大隈から相談を受けたお倉という人物への挨拶について、仲介を断る内容が書かれている。

このお倉という人物だが、横浜にあった料亭・富貴楼の経営者と考えられる。富貴楼は政財界の人物が交流の場として多く利用した料亭で、大磯にはその別館的な役割を持った群鶴楼が存在した。群鶴楼は陸奥の別荘の東隣にあった旅館で、大隈の大磯別荘とも近かった。大隈が群鶴楼に滞在した記録は現時点で確認できないが、明治二十二年一〇月一二日に富貴楼にて伊藤と密談を行っていることから⁽³⁷⁾、お倉との接触があった可能性は十分にある。

大磯別荘を市兵衛に売却した理由だが、大隈は松隈内閣の時に外相と兼務する形で農商務相を勤めており、前任の榎本に代わり足尾銅山鉅毒事件の処理にあたった。足尾銅山は市兵衛が興した古河財閥が経営する銅山だった。この事件で両者は関係を持つようになったと考えられる。そして、前章で述べた通り、隣接する陸奥の別荘が陸奥亮子へと相続され、その相続に市兵衛が関与していたことから市兵衛への売却を検討したのではないかと考えられる。また、陸奥の別荘が古河家の所有となる可能性を含んだ状態で、大隈の大磯別荘も購入すれば敷地が広がり、古河家としてもデメリットではなかったのだろう。

おわりに

本稿では、大隈の大磯別荘の利用実態について明らかにした。

大隈が大磯別荘を購入した頃、周辺は山縣や伊藤ら政治の中心人物が別荘あるいは本邸を構えており、大磯は政界人の交流場所として定着しつつあった。しかし、大隈にとっては政治上対立関係のあった人物らが周辺におり、特に東隣には政敵であった陸奥の別荘がすでにある状況だった。新聞記事から、陸奥も大隈が隣に住むことに対して決して前向きな考えをもっていないことが分かった。そのような場所を選んだ理由としては、西隣にあった鍋島家の別荘の存在が大きかったと考えられる。

大隈の別荘利用の実態を新聞記事から分析したところ、明治三〇年から三二年までの利用が活発で、売却前は利用頻度が下がっていた。避暑避寒のための利用で、年越しを大磯で過ごしていたことが明らかとなった。饗応好きで知られる大隈だが、大磯で実施した園遊会是一度のみで、ほとんどが早稲田邸での実施だった。また、療養に関しても基本的に官邸もしくは早稲田邸を利用しており、大磯別荘はあくまで家族や周辺の人物とゆつくり過ごすための場所、早稲田邸とのすみわけがあったと考えられる。

別荘所有時期の四年間において、大隈にとって大きな出来事といえるのが、松隈内閣倒閣後の政局にかかわる伊藤との会談と皇族の別荘利用であった。松隈内閣の倒閣は大隈が大磯別荘を購入して約半年後のことだったが、この時期に大磯に別荘を構えたことで、次期首相となる伊藤との会談が大磯で行われた。

大磯での政治家の交流は大きく分けて二つの時期に活発化し、一つは第一次山縣内閣組閣前後(明治二一〜二三年)で、もう一つが松隈内閣倒閣後であったと考えられる。後者の時期に、大隈が大磯別荘を購入したこと

は、政党政治の樹立を目指し勢いをつけていた大隈にとって、政治の動向を確かめることのできる機会を得たといえる。

また、皇族の別荘利用は大隈の大磯別荘の地位を高めると同時に、大隈自身にとっても名誉なことであった。

別荘の売却については、早稲田邸の火災が大きな要因の一つと考えられる。本邸の火災は大隈の住処が失われたことを意味し、早稲田という場所への思い入れからも再建は必須案件であり、大磯別荘の売却は致し方ないことであつた。売却前にはすでに利用頻度が落ちていたことも売却の決断につながつたと考えられる。

大隈はわずか四年という短い期間の別荘所有であり、家族とのプライベート利用という機能から実態を明らかにする史料が非常に少ない。早稲田邸や国府津の別荘などの写真はあるものの、大磯に関してはほとんど残されていない。しかし、本稿ではわずかな史料を一つ一つ丁寧にみることで大磯での動向の一端を明らかにできた。

また、松隈内閣の倒閣後、新内閣の組織に関する協議が伊藤と大隈間で活発に行われた。その場所が大磯であり、それは伊藤の本邸があつたことに加え、大隈がちょうどその時期に大磯別荘を購入した背景がある。政治家交流が、伊藤や山縣を中心としたものであつたことは間違いないが、大隈の存在により、犬養毅や大石正巳など進歩党派、つまり、政党政治を主張する政治家が大磯に来るようになった。このことから大隈の大磯別荘は大磯に集う政治家の幅を広げ、より一層大磯の政治家交流を活性化させたという点で非常に意義深いことであつた。

本稿では大磯の別荘地という歴史の一部を分析したに過ぎない。大隈の大磯別荘についても細かい人物同士のやり取りや、古河家に所有が移った後の状況を分析することができなかった。この点は今後の課題としたい。

注

- (1) 越沢明「湘南の旧別荘の保存問題―特に池田成彬と陸奥宗光邸について―」（『日本歴史』五一号、一九九〇年）。
- (2) 水沼淑子「大磯における初期別荘建築の様相について―旧大磯町行政資料による検討―」（『大磯町史研究』一五号、二〇〇八年）、「明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態―近代大磯における別荘建築に関する研究―」（『日本建築学会計画系論文集』第八一巻七二〇号、二〇一六年）、『近代日本の別荘建築―湘南大磯の邸園文化』（創元社、二〇二四年）など。
- (3) 小山七海・荒井歩「神奈川大磯における別荘居住者間の関係性と別荘地の立地特性の変遷」（『東京農業大学農学集報』六五巻三号、二〇二〇年）。
- (4) 佐藤信『近代日本の統治と空間』（東京大学出版会、二〇二〇年）。
- (5) 奈良岡聰智「近代日本政治と「別荘」」（筒井清忠編『政治的リ―ダーと文化』（千倉書房、二〇一一年）、「政界の奥座敷」大磯の形成に関する一考察―山縣有朋、陸奥宗光、伊藤博文の別荘を中心として―」（京都大学法学会『法学論叢』一九四巻、三号、二〇二三年）など。
- (6) 池田さなえ「明治期日本における政治家ネットワーク形成―品川弥二郎・京都尊攘堂人脈の分析から」（国際日本文化研究センター『日本研究』六六巻、二〇二三年）。
- (7) 大日方純夫「大隈重信早稲田転居後の雉子橋邸―フランス公使館となった経緯の解明―」（『早稲田大学史紀要』五五巻、二〇二四年）。
- (8) 「御届」明治三〇五月三日（『旧大磯町役場行政資料』大磯町郷土資

料館所蔵)。*以下、所蔵先省略。

- (9) 水沼淑子『近代日本の別荘建築―湘南大磯の邸園文化』、一〇四頁。
- (10) 『東京朝日新聞』明治三二年一〇月一五日、『読売新聞』明治三二年一〇月一四日。
- (11) 『報知新聞』明治三〇年五月一二日。
- (12) 佐々木雄一『陸奥宗光―「日本外交の祖」の生涯』(中央公論新社、二〇一八年)七二、二七七―二七八頁。当時、大隈は参議として明治政府で働き、陸奥は大蔵省に出仕していた。井上馨らが、大蔵省を辞めたため大隈が管轄することになり、陸奥は大隈のもとで働くこととなったが、大隈のもとで働くことに不満を抱き、大隈への批判や攻撃的姿勢を強めていった。
- (13) 「家屋新設」明治三〇年三月二九日(「旧大磯町役場行政資料」)。
- (14) 真辺将之『大隈重信―民意と統治の相克』(中央公論新社、二〇一七)一四九頁。
- (15) 伊藤之雄『大隈重信―「巨人」が夢見たもの』上巻(中央公論新社、二〇一九年)三四九―三五七頁。
- (16) 『東京朝日新聞』明治三〇年四月二七日。
- (17) 『読売新聞』明治三〇年五月九日、『報知新聞』明治三〇年五月九日。
- (18) 『東京朝日新聞』明治三〇年六月一六日・一八日・二〇日・二二日、『読売新聞』明治三〇年六月一八日・二〇日・二二日・七月三日、『報知新聞』明治三〇年六月一六日・一九日・二二日・七月三日・八日。
- (19) 『読売新聞』明治三〇年八月一五日。
- (20) 『東京朝日新聞』明治三〇年八月一六日。
- (21) 『東京朝日新聞』明治三〇年八月一八日。
- (22) 『東京朝日新聞』明治三〇年九月三日。
- (23) 『読売新聞』明治三一年一月四日。
- (24) 『読売新聞』明治三一年一月五日。
- (25) 『東京朝日新聞』明治三一年九月二九日、『読売新聞』明治三一年九月二七日・二八日。
- (26) 『東京朝日新聞』明治三一年一〇月二日、『読売新聞』明治三一年一〇月二日。
- (27) 『東京朝日新聞』明治三三年二月六日。
- (28) 「建物遺産相続ニ付御届」明治三〇年一〇月(「旧大磯町役場行政資料」)。*傍線は筆者による。
- (29) 「土地建物売買届」明治三七年一二月二九日(「旧大磯町役場行政資料」)。
- (30) 「常宮周宮大磯滞在通知」明治三三年二月一日、早稲田大学図書館所蔵。
- (31) 前掲注(14)、一一二・一一三頁。
- (32) 『読売新聞』明治三一年六月一七日。この行啓は梅雨の時期による天候の不安定さにより見合わせとなった(『読売新聞』明治三一年六月二二日)。
- (33) 『東京朝日新聞』明治三三年二月一九日。
- (34) 『東京朝日新聞』明治三三年三月二八日。
- (35) 『読売新聞』明治三四年三月一五日。
- (36) (明治三四年)六月一五日付大隈重信宛岡崎邦輔書簡(「大隈重信関係文書」三、みずす書房、二〇〇六年、九二―九三頁)。
- (37) 『読売新聞』明治三二年一〇月一四日。